

「やまなし」の シュールな会話？

京都教育大学教授
森山卓郎 もりやま たくろう

宮沢賢治の「やまなし」は好きな作品の一つだ。すぐ近くにある死。かわせみのような存在もやってくる。しかし、なんともうっとりするようなやまなしのような存在もやってくる。いろいろとやってくる運命を受け入れるしかない私たちの生の弱さ、寂しさ、ささやかな喜びとが、瞬間瞬間の美しい描写と共に描かれる。例えば出てこないお母さん蟹のことも含め、身を寄せ合って生きるかのような親子のほのぼのとした感じも好きだ。

しかし、この冒頭の会話は、なんとなくというか、実に謎めいている。

「クラムボン は 笑ったよ。」

「クラムボン は かぶ かぶ 笑ったよ。」

「クラムボン は はねて 笑ったよ。」

「クラムボン は かぶ かぶ 笑ったよ。」

実は小学校のころ、これはシュールな会話だと思った。会話として流れていないのだ。どんな兄弟や、こいつら？——普段の感覚で考えてみる。

A 「〇〇はお茶飲んだよ。」

B 「〇〇はかぶかぶお茶を飲んだよ。」

いくら子どもでも、そんな会話、します？

確かに会話文が並んでいると、会話としては交互に話をしていると解釈するのがふつうだろう。が、独立したかぎ括弧の発話でも、「間」があり、時間の流れがあれば、同じ人物の会話を独立して書くことはあっていい。逆に、そうすることで、流れていく時間も感じられる。

そう、この部分、私は二人が交互に話す会話ではないと考えている。おそらくは弟蟹がクラムボン（たぶん自分

が吐く泡のことだと思いが、わからない。流れる泡は別に「泡」とされている。を見て、しばらく一人で話しているのではないか。そう考えると、

「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」

というお兄さん蟹の言葉もしっくりくる。ここで兄が弟の文脈に入ってくるわけだ。

もっとも最終的にはわからない。それが解釈の自由性というものだろう。ただ、一つ一つの会話文について、どういう状況で誰がこの文を言ったのかということについて、立ち止まって考えてみることは大切なはずだ。ぜひ子どもたちに主体的に考えさせたい。もちろんシュールな解釈も自由！